

Title	菅原道真詩文研究 : 継承と独創
Author(s)	高, 兵兵
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/46576">https://hdl.handle.net/11094/46576</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	髙 兵 兵
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学位記番号	第 19944 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	菅原道真詩文研究—継承と独創—
論文審査委員	(主査) 教授 後藤 昭雄  (副査) 教授 高橋 文治 助教授 荒木 浩

#### 論 文 内 容 の 要 旨

申請論文は平安朝漢文学における最も主要な詩人である菅原道真に関する研究で、前篇「菅原道真の美意識と表現」、後篇「菅原道真の生活と思想」から構成されている。

前篇は3章から成る。第1章は道真の詩と『古今集』の和歌の題材(鶯と花)および比喩表現との関係について論じている。第2章は「白色好尚と日本の美意識」と題して、道真の詩には梅、牡丹、菊などの花を詠んだ詩がかなりあるが、それらがいずれも白い色の花を詠むものであること、そして、これが中国の詠花詩の好尚とは対照的であることを指摘し、道真の白い花に対する好尚が日本の美意識に由来するものであることを述べる。第3章「晚秋美に対する好尚及びその背景」も同じく美意識について論じたもので、一つに残菊という題材を取り上げ、日本と中国とにおける残菊に対する美意識に違いのあることを述べ、それは重陽と菊花の結びつきについての認識に差があったことに由来すると論じている。また「孤叢」という表現を取り上げ、中国詩ではわずかに白居易詩に一例のみが存するこの語が道真の詩ではかなりの用例があることに注目して、この語が、平安朝詩において、道真の詩を通して詩語として確立されていく過程を明らかにしている。

後篇「道真の生活と思想」はその居住観を論じた第4章と交友についての第5章の2章から成る。第4章は白居易との対比ということをも基本的視点とする。そうして道真の平安京宣風坊の邸と白居易の洛陽履道里の邸宅を詠じた詩の表現の分析を通して、道真の実生活においても白居易に倣おうとした姿勢のあったことを明らかにする。次いで、同じく都を離れる立場に置かれた讃岐と太宰府とで、「官舎」に対する道真の態度に違いのあることに注目して、それぞれの土地にあつての道真の心境の変化を論じている。さらにこの論点を踏まえて、初めに戻って、地方における住居に対する態度の相違を通して、道真と白居易との居住観の差異を明らかにしている。第5章は、まず言葉としての「詩友」を取り上げ、白居易との相違を視点として道真の交友の特徴を論じる。次には源能有に着眼して、能有と道真との交友について述べ、また能有を中心とした交友の環が存在したことを指摘して、これを形成していた人びとを明らかにしている。さらに、人に物を贈るのに添えられた詩を「贈物詩」と捉えて、交友関係の考察資料に位置づけ、この「贈物詩」が和歌と関わりを持つものであったと論じている。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は白居易を比較の対象に捉えるという視点を一つの基点としている。こうした視点はこれまでの研究においてもしばしば取られてきたことであるが、従来の研究の多くは白居易文学の発想表現がどのように菅原道真の文学に摂取されているかを例示するものであった。本論文にもこうした方法によるものも含まれているが、申請者がより重きを置いているのは、単純な影響関係の指摘ではなく、唐という空間、また時代における白居易の文学を道真の文学を考察していくうえでの比較対照の指標に置くという立場である。こうした視点も申請者が独自に発見獲得したわけではなく、示唆を与えた先行研究はあるのであるが、これに学びつつ発展させて基点に置いて考察し、成果を挙げている。

これと通底するが、前篇の諸論においては、従来の漢詩の影響のもとに和歌の成立を論じる論が、多く〈中国詩→日本漢詩→和歌〉という流れのもとで考えるという立場で考えてきたのに対して、申請者は「鶯花」や「残菊」という題材、比喻表現の手法、白い花に対する好尚などを対象に、これらの中国詩のありようを検討して、これと比較しつつ、道真の詩における中国詩とは異なる美意識の存在、また日本漢詩の和歌との類似性を明らかにしている。これもまた最近の日本漢文学研究における新たな潮流であり、本論文もこれに学ぶものであるが、確実な例をつけ加えて、一步を進め、こうした視点の必要性、有効性を実証したものと評することができる。

また、最近の白居易研究の動向に目を配り、その研究の方法を取り入れ応用して成果を挙げている点もある。後篇における道真の居住観を論じた論、また「贈物詩」についての論がそれである。道真の文学について、こうした視点から考察したものはなく、研究の視点を拡大したもので、中国文学の研究動向にも目配りをし、これを学び取ろうとする積極的姿勢は評価してよい。

ただし、前篇の諸論の成熟度に比べると、後篇のそれにはなお不十分さも残っており、第5章はまとまりを欠く点もある。

なお、本論文の基となっている論文には審査を経て学会誌に発表されたものがかかなり含まれている（5点）。

菅原道真の文学の研究はかなり盛んに行われているが、本論文はその進展に寄与をなすものであり、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。